

## すぎなみコミュニティカレッジ

講座：『時代に学ぶ地域活動』

### 1. 「社会教育とは ～歴史・くらし・地域～」

NPO・ボランティアを志す方々へ必要な社会教育の概論をご紹介します。

### 2. 「わたしたちの地域活動」

杉並で活動している地域活動の実際をご紹介します。

< 講座の主旨 > 宇治川 敏夫さん

21世紀に入り3年目を迎えましたが、先行き不透明感が相変わらず続き、社会問題も山積しています。いま、その問題を大人自身の問題であるにとらえたとき、「大人が自らを振り返り、学び、成長していく」という、社会教育の重要性を再認識し、地域活動の原点としての社会教育の歴史に学んでみようというのが本講座の主旨です。

杉並では、公民館運動を始め、数多くの様々な先駆的な取り組みがなされてきています。その具体的な取り組みに学び、現在に至るまでの社会教育における変遷をたどります。各回の内容は、その時代の息吹を感じさせてくれるエッセンスを凝縮して取りまとめたものです。社会教育の現代的意義を探ります。

この記録は、杉並の社会教育の歴史をまとめていく際の第一歩となるものです。現状分析から問題解決の糸口を見つけるのではなく、もっと広い視野からの発想も求められてきます。21世紀型のコミュニティ活動が発展していくための手がかりとなってくれることを期待して行われる講座でもあります。

Vol. 4 「わたしたちの地域活動」

2003年2月26日（水） 10：00～12：00 於：杉並区立荻窪体育

館

講師：寺田かつ子さん（てらだ かつこ）

杉並区消費者の会。

34年前、杉並区消費者の会を設立して以来、消費者運動を続けている。

講師：白川すみ子さん（しらかわ すみこ）

1972年杉並・老後を良くする会を設立。

現在、NPO法人新しいホームをつくる会代表。

講師：吉田阿津子さん（よしだ あつこ）

われらプロジェクト。冒険遊び場実行委員会代表。

塚山公園で月2回開催している。

講師：宇治川敏夫さん（うじかわ としお）

地域活動を楽しむ会会長。キーワードはおやし、冒険、NPOなど。

司会：小澤千鶴子さん

わたしたちの地域活動1．杉並区消費者の会 寺田かつ子さん

昭和44年、東京都に経済モニターという制度があり、それを終えた方たちの経験者の集いで、「消費者よ手をつなげ!」という呼びかけがあり、国の方ではいま改正が問題になっていますが消費者保護基本法が成立し、これによって地方自治体も消費者行政を始めようというころ、私たちの会も産声をあげました。

ただ、私たちも何をどうやってよいのか分からないままに始めたのです。いまは物価はデフレ気味ですが、当時はインフレでお豆腐が10円上がるとか牛乳が10円上がるというささやかなものが、私たちの家計に響くよ、ということで、みんなで手を結んでやろうとういうことになり、経済モニターを終えられた杉並区にお住まいの方たちに往復ハガキを出して、こういう会を持ちませんかと呼びかけたのが会設立の始まりです。この頃は、マスコミも会の設立の話題に飛びついたものですが、今はそれほど取り上げられることはありませんね。それほど、世の中に問題が多いということでしょうか。

こうして杉並区消費者の会が誕生したのですが、私たちの年代はPTAから婦人学級、生活学校を経てきた人が多かったので、すぐにいろんなことを始めることができたし、行政の方も消費者保護基本法を制定したところなのでいろいろ力を貸してもらえました。社会教育の室井先生の手も貸していただきました。日銀に貯蓄増強中央委員会（貯蓄を勧めている）というものがあり、この力や新宿の東口にある富士銀行（現みずほ銀行）の会議室を借りていただいて呼びかけ会を開き、その後発会式もここでやりました。

何をどうやっていこうかということで、まず学習を始めました。都の方でも各種講座を開いていましたが、私たちは新聞を見て情報をひろう方法などで勉強しました。食品に関しても、ちょうどその後から食品添加物の問題が出てきて、これも勉強し始めました。やがて学習グループができます。最初は経済グループで、新聞の中から情報を拾ってきて、これはどうなっているのかを学習したりしました。専門家の方に添加物の話をうかがって食品グループもできました。また、当時保険医の総辞退があり、それをきっかけに医療グループもできました。各グループは月に1回、運営委員会は月2回開催し、現在に至っています。

PTA、婦人学級、生活学校というところを経てきた私たちは、その中で基礎的なことを教わりました。社会活動をするにしても基本的なことがいろいろあります。たとえば会議をどうやって持つか、広報誌をどのように作るかなどです。いまは婦人学級もなくなってしまいましたが、こうした基礎的なことを社会の運動を始めようという前にどこかで学習できるところがあればよいと思います。よく日本人は会議がヘタだと言われますが、幸いにして私たちは、こういうところで勉強できたことが後の活動で役立ってきたと思います。

その後も石油ショックなどの問題、ゴミ問題などと、消費者問題の分野は広

がりをみせています。いま私たちが取り組んでいるのは、司法改正の問題です。訴訟で勝った人の弁護士費用も負けた方が負担するという敗訴者負担が盛り込まれており、これに反対をしなければとやっています。生まれてから死ぬまで、消費者問題にはありとあらゆる問題が含まれているのです。

わたしたちの地域活動2 . 杉並・老後を良くする会 白川すみ子さん

消費者問題と同じように、地域福祉も揺りかごから墓場までと言えらると思えます。

私たちの活動は、丸31年になりますが、始めのころ私は地域活動という意識はなく、大勢兄弟がいる長男と結婚し、私はひとり娘だったので、両方の親の面倒を見なければならぬ状況でした。1970年(S45)、当時パーキンソン病で自分の母が入退院を繰り返しており、そこに夫の父が脳卒中で倒れるということが重なり、二人の親の看病・介護を同時にやらなければならぬになりました。これは私の人生の最大の危機、これでは自分が先に死んでしまうと本気で思いました。

ところが、そんな大変なときに、夫は働き盛りで国内外に出張、長男は高校生、次男は中学生です。その次男も体が弱く、家族のうち家にいるのは一人か二人という中で、夜中2時間と続けて眠れないという状況が続いていました。介護する方もされる方も人間らしく生きてゆくためには何が必要なのか、考えに考えた結果が、市民運動型ボランティアの立ち上げにつながったのです。

後から気付いたことですが、杉並で長く地域活動を続けてこられたお仲間にずいぶん助けをもらうことで、何とかここまでやってこれたのだと切実に感じます。振り返れば、身の程知らずの言い出しっぺで始めたころ、私は婦人学級卒業生による読書会に参加していました。そこでは月に1回、読み返しをした本の感想を話し合う会をやっていましたが、ちょうど参加者の年代が親の老後が気になるときで、いつの間にか老人問題の話になっていました。皆さんが深刻な問題を抱えておられたので、私のよびかけに賛同してもらうことができたのだと思います。

1972年2月、我が家で、「老人問題について語り合う会」を開き、それを出発点として市民運動型ボランティア団体の発足にこぎつけたのです。創立講演を、当時日本の社会福祉の第一人者とされた、私の高校時代の恩師でもある日本女子大学の一番ヶ瀬康子先生にお頼みして、室井光子先生と相談の結果高円寺青年館で、6月10日に「杉並・老後を良くする会」という団体を設立しました。

次に一番大変であった最近5年間の活動を振り返って、特に印象深いことを一つだけお話致します。14年前に民間団体としてケア付きアパートを、23区の中で初めて作り、「ナンバーワンになれなくてもオンリーワンになりたい」を合言葉に活動する中から、24時間・365日、電話一本で駆けつける、高齢者のための「福祉ダイアル」を始めました。お役所言葉では、直接訪問援助と言う

言葉になりますが、名称も「安心ダイアル」と変わり、今年は更に充実した形にリニューアルされます。最初は小さな民間団体から、コツコツと始めた小さな活動が、徐々に大きな実りになってくるのを実感しているところです。

31年前、その地域活動があったからこそ、自発的なボランティアがあり、地域の在宅高齢者の実態調査会を始めることもできました。机の上の勉強から始まった会ではありませんが、実際に自発的主体的に取り組むことで、民間のボランティアだけではできないことが分かってから、主婦の限界を超えるような厳しい運動でも成果が実らないことに思い至り、そこで再び学習活動に戻りました。学習活動で学んだことを地域活動や運動にフィードバックする初期の段階で、そんな私たちなりのやり方が定着したことが、後の活動を展開する上で大きな要因となったと思います。

地域福祉との係わりを持つものとして、行政と福祉の現状と課題をよく話し合いますが、その経験から、まず第一に大切な点を申し上げますと、地域福祉をより良いものにするには、地域の特性を生かすというやり方です。例えば、その地域に、定年前後の60歳代の方が多いとします。何かをやりたい、お役に立つようなことができるのではないかと考えている方が多い地域なら、それが地域の特性です。活動していただくには、どこかの組織に入るか、組織を持つ事が必要です。私たちからすれば、このような方々に介護関係の福祉事業に協力の申し出でを戴ければ大変ありがたいわけです。また、子育て中のお母さんが多く住む地域なら、児童館活動、読み聞かせ活動と結びつくでしょう。そこから地域の特性が生まれてきます。組織を預かるものは、地域に住む方々の特徴、何をしたいと願っているのかななどを、普段から見極めることが重要と考えています。人材と拠点とを結びつける観点です。

2番目は、活動組織についてですが、活動メンバーの多様性が大切と考えています。私たちの組織は発足時に、20歳代から80歳代までの方々が約90人いまして、男性の構成比率（15%）は昔から変わりませんが、最近若い人が増えてきています。活気を保つ意味でも、構成員の多様性が必要と考えています。また、福祉・医療の世界は、専門家の方と専門職の参加が不可欠です。ボランティアの、民間の善意だけでは、解決できないものがあることを認識すべきと考えます。専門家の協力を得られる分野、介護保険事業も幅が広いので、その中から、自分たちの得意な分野に戦力を集中すべきと考えます。ですから、専門の戦力をお互いに保全するネットワークが必要で、そのネットワークは、誰のための福祉か、制度なのかを自問する機会となります。そしてできるだけ早く、若いメンバーに成長していただき、次世代にバトンを渡すようにしたい。たいへん細やかな神経を遣う仕事ですから、理性を失わないで活動したい。サービスを必要とする主人公の立場に立って「できるだけ、自由に、対等に、地域社会で他者への思いを互いに生かし合う」この原則が、地域福祉の機能を活性化させる重要な点と考えています。

ついでですが、行政と密接に係わり、一緒に仕事をする機会が多くなると、次第に、こちらが遠慮して意見が言えなくなるというジレンマがあることも申

し添えておきます。

わたしたちの地域活動3 . 冒険遊び場実行委員会 吉田阿津子さん

「冒険遊び場」の活動は現在3年目ですが、地域活動を展開するなかで、どうすればよいかと悩んだり、壁にぶつかったときに、すでに活動経験の長い先輩方の苦労話やアドバイスを受け、自分の考えたことを自分なりのやり方でやってこられたことに感謝しています。いろいろな世代の人につながって知恵をもらうということが自分自身の体験からわかったので、私も若い人たちとつながっていきたいと思います。

厚生労働省の児童家庭局育成環境課と社会福祉医療事業団の助成金を基にして活動していますが、活動資金の金額が大きいため個人の団体にはだせないということで、全国子ども連合会を窓口にして、そこから助成金を戴き、杉並から発信ということで3つのプロジェクト（遊び場づくり、地域調べ、引きこもりと不登校）を進めました。私はその中の遊び場づくり担当という立場です。他の担当の方の活動については、お話を聞いてきましたので、それを発表させていただきます。

#### 地域調べ

小学校・中学校の総合学習を先生と一緒に考え組み立てることをしている。その人たちの子どもたちと関わった印象は、感動の仕方を知らない子どもが増えている。全体的に体験の少なさからくるのだろう。体験とは遊び、自然に触れるという単純なことだが、そういう体験が不足しており、創造性に欠けているようだ。体験には知の学び、感性の学び、行動参加が必要だと考えているが、遊びはそのすべての要素を兼ね備えているのもっと遊びをさせるべきだろう。遊びや調べ学習を通して体験を獲得することで引きこもりも予防できるのでないか。

#### 引きこもりと不登校

1年目は教育評論家、学校教師、弁護士、引きこもり経験者やその家族など多くの区民の方の参加を得て、いまの子どもの引きこもりのことを話し合った。2年目は、いまひきこもっている方に直接何かの形でつながれないかということを感じ、引きこもりの若者や大学生有志で冊子の編集が始まり、臨床心理士の先生の司会で、ぽつりぽつりと語り始め、「心の地図帳」という小冊子が完成した。3年目は「心の地図帳」を持って編集に関わった人たちも参加した話し合いを杉並区の5カ所で順番に行った。引きこもり対応事業は「居場所づくり」をテーマにして、今後は特に協働し、赤ちゃんからお年寄りを含めて事業として継続してゆく予定である。

#### 冒険遊び場

私の活動のきっかけは、世田谷のプレイパークをやっている人との出会いにありました。子どもが楽しく遊んでいる姿を見て、単純に自分の子どものために杉並にもそんな施設が欲しいと思ったのです。西荻に住んでいるプレイリー

ダーに出会い、彼もそんな施設があればよいということで、木登りができ、火も使えるような場所が近所があればいいねと話しました。私は元々おしゃべりなので、いろいろな人に話をしていたら、それを本気の声として聞き入れてくれたのだと思いますが、社会教育主事の人やボランティアセンターの職員の方がアンテナを拡げてくれ、他にもやりたがっている人がいることも教えてもらいました。それではみんなで集まろうということで、杉並方式で杉並らしい遊び場を作ろうということになったのですが、残念ながら、それは話だけで終わってしまいました。

まず、最初は行政に訴えても相手にしてくれませんでした。また、杉並には、子どもにどろんこ遊びをさせたいというような親御さんはほとんどいません。それどころか、公園から危ない遊具を取り払えなんて苦情が多発しているのです。だから、そんな公園は作れないと言われていたところに、助成金を戴けるということで、頑張ってもう一度区に交渉してみようと思ったのです。お金はいらぬからソフトの面だけ応援してほしいと公園緑地課に行きましたら、最初に行ったときと担当者が代わっており、それが結果的にラッキーだったのです。そこで聞いた話では、子どもを公園で見かけなくなったとか、さまざまな禁止事項も、もともとは事故が起きたことをきっかけに増えてきたのだから、それをいきなり禁止全部なしにはできないが、いまの公園の使われ方は寂しすぎる、もっと良い使い方はないかと考えているところだったのです。ただ、普段禁止されていることをやらせてもらう以上、大人が見守って自由に遊ばせる、遊具も作らせて創造性につながるということで許可が出ることになりましたが、そういう場所が杉並にも必要だという、後押しする声があれば公園緑地課だけではYesとは答えられないと言われました。そこで、児童課とか教育委員会といった後ろ盾があれば、ということですかと尋ねますと、まあ、そういうことかなと返事されたので、早速そういうところに出かけ、必要性を求めました。すると、今度は、こちらは構わないが、公園緑地課がどう思うかと、ということをお問われ、公園緑地課は認めるということをお話して、ようやく実現にこぎつけました。

子どもたちは、ロープを木にかけたり、ブランコにして遊んだりしていますが、それらは不安定なので、無理なことをすると怪我につながります。しかし、子どもの持っている危険回避能力は高く、危険なことはやりません。また、ベーゴマ遊びに大人が参加してくれ、新しいコミュニケーションが生まれたりしています。大人に関わってもらうことは子どもにとっても大切なことだと思います。いまの私の夢は、常駐のプレイリーダーのいる常設の冒険遊び場を作りたいということです。

わたしたちの地域活動4．地域活動を楽しむ会 宇治川敏夫さん

第1回目の講座で申し上げたように、「自らを振り返って成長することが社会教育ではないか」と思いますのは、特に地域活動と関わっていないお父さん

に必要ではないかという問題意識があるからです。私には、地域、おやじ、冒険という三つのキーワードがあります。NPOとかボランティアという言葉もキーワードですね。

地域活動を楽しむ会設立の経緯ですが、お父さん方が地域活動に関わる機会がないと地域に根ざして活動されているお母さん方の方から情報が入ってはくるけれど、なかなか主体的には関わる事ができない。地域活動の手助けをする際、お父さんたちは、肩書きとか役職とかに捉われがちであるし、現実を考えると、給料を持って帰る役割である家の大黒柱的な役割を放棄して地域活動をして下さいということもできない。そんな状況を変えていきたいと考えました。

私が1989年に中野から杉並に移ってきたときは、ちょうど社会教育センターができた頃です。家庭を持ち、子どももでてくると、自分が地域の中で孤立しているのではないかという思いにかられて、社会教育センターの講座なども受け始めました。その後1995年には区民大学でいろんな人と出会いました。まちづくりの団体に出会ったり、障害者の方のパソコン活用支援をしている団体とか、そういった方たちから学んだことが大きいと思います。

最初に考えたのは、お父さん達が地域に入るのは大切だけれど、その仕組みをいままでと違う形で作れないか、ということです。そこで、地域の中で子ども行政はどうなっているのか、社会教育主事の方に話を聞かせてもらいました。自主グループが出来たきっかけは「お父さん！出番ですよ」という7回の講座が始まったことです。そこで感じたのは、企画から関わっている方は行政のことに詳しいということです。しかし、私を含めて参加者にはそうでない方も多い。情報ギャップがあるので、情報を共有していくことができれば、お父さん達のノウハウや経験を活かして、行政と対等に話し合いができるようなグループにしていくこともできるのではないかと考えました。

アンケートをとったら、小学校におやじの会のある学校が15校あることがわかりました。ない小学校に作れなかった理由を聞くと、人材がないという答えが出てきました。また、PTAにお父さんが積極的に関わっている所とない所、あるいは、児童館と学校がうまくいっている所とそうでない所があることがわかりました。PTAとの関係、児童館との関係づくりのとっかかりができないわけですね。私の経験からいうと、そこに例えば仮に行政の意図があったとしても、最初はそれに乗っかればよいと思います。その後、活動をグループ化していくのがやりやすい場合もあると思うのです。

今後の活動についてですが、これまで3回「おやじフォーラム in すぎなみ」を開催してきましたが、これを独立させてもよいのではないかと考えています。私たちは、その「場づくり」をしているのであって、たとえば、分科会方式にする方法もあるのではとも思っているのです。いずれにしましても、苦楽を共にするという言葉もありますが、特にお父さんは普段肩ひじを張って生活しているわけですので、気軽に話し合いのできる場づくり、雰囲気づくりが大事です。そして、楽しみがなければ長続きしないと考えています。

質問：皆様の活動と行政との係わりについて一言ずつお話しください

寺田さん

私達の活動は、行政が消費者問題に対して認識を同じにする頃であったので、お互い一緒に歩むことが出来た時代でした。行政に望むことは、世の中の動きに目を向け、住民と話し合うという姿勢でいて頂きたいと思います。そうすれば、私たちと手を繋いで一緒にやってくれる。私達の方から言えば、行政に私たちの取り組みの情勢を理解して頂く様な情報を提供して呼びかけて行く。行政を取り込んでいく。行政が分ってくだされば、地域活動の場も予算も頂けるということだと思います。税金をどのように使うのか、私達が関心のあるところですが、役所の各部の動きに知らん振りをしてしないで、その動きに目を向けるべきでしょう。

白川さん

活動を始めた最初の5年間は、全く相手にして頂けませんでした。杉並区では、まだ老人福祉課が出来る前ですから、もの好きな主婦が始めた活動を「聴きおく」、棚上げにするという対応でした。住民の役に立つのが役所なのに、と思いながら、石の上にも3年、5年、10年の活動をしているうちに、数える程度ですが、分ってくださる役所の方が出て参りました。こんな苦労をしながらここまでやってきました。最近、思うことですが、お世話になった方から頼まれて行政の審議会に仕方なしに出るのですが、率直に言い過ぎるとかえって、その方にご迷惑をかけるのではとついつい考えてしまいますので、役所とは親しくなり過ぎずに、ホドホドのお付き合いが肝要と思うこのごろです。

吉田さん

「冒険遊び場」の活動は、教育委員会・児童課・公園緑地課との連携を進めながらここまできましたが、資金の確保以外は上手くやっています。この活動の状況には区も関心があったとみえ、職員研修の席でも経過報告を致しました。「複合施設をつくる会」の方は、荻窪駅近くの青空駐輪場のあとに複合施設を建設中ですが、荻窪北児童館・消費者センター・西福祉事務所・環境リサイクルセンター・社会福祉協議会が入る施設になります。複合施設ですから、横の付き合いが出来る、子どものエネルギーを見て頂く事も出来るなど、こんなことを期待しています。この二つの活動を通じて、行政との係わりを持ったのですが、多くの先輩からのアドバイスを頂きました。反対運動を展開しながら行政から何がしかの成果を勝ち取る方式でなく、より良いものにしましょうよという、提案型の活動を通じて行政の信頼を得るやり方で、夢を実現してきました。私たちは、行政の方々の愚痴を聞きながら、こちらも愚痴を言いながら行政の理解を求めて、区民の意識も変えていくというやり方でいきたいと考えているところです。

宇治川さん

先ず「地域活動を楽しむ会」の名称の由来を話します。私たちがこの会を発



足させる直前に私も関わっているのですが、「地域活動をすすめる区民会議報告書（2000年3月）」というものが作成されていました。この報告書のことか頭があり「お父さん！出番ですよ」という講座終了後、自主グループを作る際のキーワードとして「地域活動」が出て来たのです。参加者に小学校のおやじの会をしている人が多かったこともあって「地域活動を楽しむおやじの会」という意見もあったのですが、それ以外の人達にも幅広く参加してもらおうということになり、現在の名称に落ち着いたのです。

報告書の中に、杉並における協働の原則『すぎなみシップ』があります。すぎなみシップは、行政が地域団体と協働して事業を行ったり、区民の活動を促進するための基本的な原則を定めておくことが必要ではないか、との問題意識から作成されたものでした。「杉並区NPO・ボランティア活動及び協働の推進に関する条例」にこの考え方が生かされています。『すぎなみシップ』に対しては、行政の方からは「以前にこういう原則がなかったからなかなか議論が進まなかった」、区民の方からは「こういうものが昔からあれば活動しやすかった」というものから、「協働は、昔からとっくにやっていることではないか、いまさら...」という意見までありましたが、NPO・ボランティア活動に対して、行政が最低限しておかないといけない基準を作るという意味では必要不可欠なものと考えています。このような基準があるから区民は安心して自由に活動出来るのだと思います。

#### 【すぎなみシップの8原則】

対等、自主尊重、目的共有、時限性、話し合い、相互理解、自立化尊重、公開

質問：介護保険に関して、白川さんに一言ご意見を頂きたい。

白川さん

介護保険は日本の老後保障、社会福祉を代表するものではないことは、先刻ご承知の通りと考えます。この制度に対して、無理がある、足りない処がある、何時まで持つのか等の意見があるということ。これは行政の公的責任の後退と見ています。昔と比べれば役所の対応は格段に良くなっており、良くやってくださっていますが、私たち区民、事業者に対しても、自己責任・自己決定・競争原理ということ、こちらは重々承知しているにも係わらずくどくどと言う、身内の区職員に対しても、「区の職員としての責任」「区職員として守るべき...」と区の記事に書かれている。これは区の職員の責任でない、区そのものの公的責任を回避しているのではないかと思うのですが如何でしょうか。

質問：地域活動をする際、メンバー間で、意見の違いが出てくるが多々あります。長く活動していらっしゃる方から、対処方法について意見を頂きたい。

皆さんの意見を集約

1. 意見の対立があるのがNPO活動であり、対立があって当たり前の世界です。対立の原因はグループにより違いますが、世代間・価値観・グループの活動暦などが考えられる。分かり合えなければ別れるしかないのですが、その前に、先ず相手の意見を聞くことからはじめ、分かり合えばより良い関係になる。分かり合える部分があれば、そこだけでもパートナーとして一緒にやっていく。根気、地道、お互いの再評価、相互理解等が必要でしょう。対立する意見の中身ですが、活動から出てきた率直なものか、単に意見を言っているのかを見極めることも大切と考えます。年に何回か討論会をやればよいと思います。

2. NPO・ボランティア活動には3タイプある、一つは達成目標があるので組織を作り活動する。二つ目は既に組織が出来ていて、この中に入って動く。三つ目は、定年前後、子育てが終わる40代後半から50歳前後の方々に、地域に関心があるので学習する。このために施設事業に参加する。特に地域に対する要求はなく自分が学習したいから活動するというタイプです。力がないと社会を変えられないから組織を持つということは大変重要なことなのです。このように住民の方がいろいろな活動組織を作ることは有意義なことであると考えています。また、組織には良い時と悪いとき、山あり谷ありで、組織を預かる人は苦労するわけですが、悪いときにどのように乗り切ってきたかを学ぶことは、プラスに働くと思います。

## 司会

歴史のある組織、新しい組織ともども、杉並の社会教育の力添えがあったお陰で育ってきたと考えています。人の話を聴く、相互理解をする態度、相手のことをより知ろうとする努力、組織内にえらい人を作らないで対等にやっていくなど、こういう訓練は社会教育という土俵の上で学んだわけです。ですから時代が変わっても社会教育は終わらないと考えます。